

# 近代日本の中国語関係書における擬声語の一考察

——『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』と『北京語の味』を中心に——

## The Study on the of Chinese Onomatopoeia in the Education of Modern Japan

—— Concerning *Banbutuseion*<sup>1</sup> and *Pekingonoaji* ——

李 夫 平\*

LI Fuping

(要旨)

本稿は近代日本の中国語教育の関係書を対象に、当時学習された擬声語を考察するものである。そのために、本論は35年の間隔で出版されたテキストの『萬物聲音』と『北京語の味』を取り上げて、擬声語を例とする語群の形態構造、意味分野を説明する。その上で、当時の現実の中国語と対照して、外国語として教授された中国語擬声語の一斑を解明する。

『萬物聲音』と『北京語の味』における中国語擬声語は各自の特徴を持っているが、近代日本で教授された中国語の状況を反映する点で一致する作用を持つ。しかし、擬声語の音形式の使用の自由度及び意味分野の分布から見ると、それらの使用率は比較的なコントラストを示している。また、当時の現実の中国語と対照してみると、『萬物聲音』と『北京語の味』に載っている擬声語は型の多様性及び使用頻度のバランスが失われている傾向が見える。

しかし、擬声語の特徴を解明するために、さらに音節パターン・音韻構造も考えられなければならない。そのため、未来の課題は本論の考察の上で、擬声語の語義と音韻の関係を検討することを通して、近代日本人が持つ中国語の語音認識の特徴を深く解釈して、そこに存在する変化・発展の状況を説明することである。

キーワード：中国語擬声語、外国語学習、音形式、意味分野、変化

## 1 はじめに

### 1.1 問題提起

近代日本の中国語教育は江戸時代に始まった。明治時代になって、中日の政治・経済などの交流が緊密になったから、北京官話を主とする中国語の学習が登場した。日本の中国語学習の時期は長く続いた。学習者の数は多

く、中国語教育関係書も膨大になり、内容も豊富かつ詳細である。

これらの文献を巡って、近代日本の中国語教育の研究が行われてきた。特に、中国語教育史の研究、中国語関係書の収集と整理、教科書の内容の研究は多い。

しかし、近代日本の中国語教育に関連する研究には不十分な分野が存在している。研究

---

\* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程3年 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

の現状を見ると、中国語教育史に関する研究はたくさんあるが、言語学研究と言語対照研究は少ない。また、教科書における言語の考察は行われているが、それは一部であり、取り上げられていないものがおおい。そして、研究の範囲も深度も十分とは言えない。例えば、品詞（名詞、動詞、副詞、感嘆詞など）の用例から、教科書に出ている言語の特徴を説明したものはごくわずかである。園田博文（1998）の「中国語会話書における助動詞「です」の用法について—明治10年代を中心に」<sup>2</sup>、李無未・楊杏紅（2011）「清末民初北京官話語気詞例釈—以日本明治時期北京官話課本為依拠」<sup>3</sup>、尹俊（2016）「『北京官話伊蘇普諭言』に見られる副詞「所」について」<sup>4</sup>などがあるに過ぎない。

本論は近代日本の中国語関係書における擬声語の状況を検討する。中国語の教育・学習は実用語学から文化語学<sup>5</sup>へと移行していく時代的特徴を持っているが、「実用語学、文化語学の如何をとわず、それを学習するには、その学習者が語学的な立場から中国語に対処することが重要である。また学習対象となる中国語の語学的な実態を把握しておくことが重要である」<sup>6</sup>ため、言語学面で、研究の進んでいない分野の一つである擬声語の考察を行うことを課題にする。

## 1.2 研究のテーマ

中国語の擬声語研究の現状から見ると、語用研究の領域で行われた考察は、近代と古代の擬声語研究が主である。しかし、わずかな歴史的な研究は主に擬声語の形態、意味、文法などの分析に限られている。それに対して、近代日本の中国語学習の関係書における擬声語の研究はほとんど行われていない。外国語教育の場合、擬声語は相対的に難しい分野である。しかも、日本において教授・学習され

た歴史的な言葉は近代中国語と現代中国語の変化の研究にとって重要な言語実例である。そのため、擬声語をはじめ、他の品詞もみな同様に研究する必要がある。

近代日本における中国語学習は語音を重要な教育のところに位置づけることが中国語の関係書に見られる。擬声語は言語音で、その意味を表わす傾向を持っている。この考えの上に立って、中国語の擬声語を学習する時、日本人はどのように語音や語義などを受容したのかを探求する。擬声語は近代日本の中国語関係書においても注目されていた。例えば、『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』（以下、『萬物聲音』と略す）と『北京語の味』<sup>7</sup>は擬声語を収載している。このような中国語教育関係書が歴史的言語に関する研究に対してどのような作用を持っているのかについて、尾崎実（2007）の次の論述がある。

教科書は、一定の編集方針にしたがい、一定の方向をもっているものであるとみれば、現実社会に対する反映のもっともよくあらわされているものの一つであるからでもあるし、そのためにもこそ、そこで用いられていることばは、日常生活と密切につながりのあるものであり、日常生活とは、かけはなれたものでありえないからでもある。具体的に例をあげていえば、過去の日本の中国語教科書は、とりわけ、実用という面に大きな傾斜をもっており、日常語というものをなるべく網羅しようとする大きな努力をはらったものであり、戦後のテキストの様に、語彙面を多少犠牲にしても中国語の語法事項を優先させているものとは、異なっている。……（中略—筆者）これら二者間（『語言自邇集』と『急就篇』—筆者注）に

においてあらわれたことばの比較検討をすることにより、現代中国語の日常語の変遷の一斑をみることができるとともに、日本の中国語教育における中国語がどのようなものであったかということも知ることができよう。そしてまた、現代中国語に対していただいているところの隔たりという感じを具体的に取り出してみることもできると思われる<sup>8</sup>。

実用の面へ傾斜している生活用語でも、それらの語法事項でも、近代日本の中国語学習書に記載されている言語は当時の中国語の実態を反映する。だが、その実態は当時の現実の中国語の特徴と比べて、「隔たり」が存在するかどうか疑問である。実際のところ、言語のその「隔たり」は過去と現在の異同を指すのみならず、外国語として教授された言語と現実の言語の関係を指す。そのため、本論は第一歩として、近代日本の代表的な中国語教育関係書に収録された擬声語を取り出し、音節の形態構造、意味分野などの特徴を論じ、擬声語の実態が反映した語彙の要素の特徴を検討する。

## 2 研究のテキスト

本論は、『萬物聲音』と『北京語の味』を分析のテキストにする。

筆者の調べた限り、『萬物聲音』の関連研究は野口宗親（1993）<sup>9</sup>のみで見られる。そこで、それはただ『兒女英雄伝』と『萬物聲音』における兒化<sup>10</sup>した擬声語を対照した結果が簡単に解説されているのみである。『萬物聲音』と『北京語の味』の先行研究はそれ以外がない。

### 2.1 『萬物聲音』と『北京語の味』を取り上げた理由

六角恒廣（1984）は近代日本の中国語教育の時期的区分を2つに分けている。第1期は明治初年から1945年（昭20）までであり、第2期は1945年（昭20）以降現在までである。第1期の特徴について、六角（1984）は中国語教育の意義ないし目的によって、「第一期の時期には、科学的な方法論を基礎とした中国語学研究や中国語教育はほとんどみられなかった」<sup>11</sup>ため、実用語の学習であったと述べている。

明治期以降の近代日本では、多くの中国語関係書が作られた。それらの教科書の種類は学習書・時文・尺牘、文法・作文、発音・字典、語彙・字典、参考書、方言、商業、軍事・警務、実務・業務、他外国語との対照、一般向け会話書などである。『萬物聲音』と『北京語の味』は近代日本の中国語教育の第1期の学習書に属する<sup>12</sup>。

しかし、1437点<sup>13</sup>もある近代日本の中国語関係書は日本の中国語教学においてすべて使用されたわけではない。それらの中で、教科書として使われたものは当時の中国語教育の状況を反映していると見て、間違いはなかろう。『萬物聲音』は『中国語教本類集成』<sup>14</sup>に「日本の中国語教学において使用された教科書を主として、それに辞典のいくらか、さらに実務用語・軍事語・会話本など」<sup>15</sup>のものとして収録されている。『萬物聲音』と『北京語の味』は共に波多野太郎（1985）『中国語学資料叢刊白話研究篇』に収録されている。波多野（1985）に載っている関係書も主に当時使われたものである。

また、1906年の『萬物聲音』と1941年の『北京語の味』は35年の間隔を持って出版されている。そのため、この二書における擬声語の考察によって、その特徴がよく見られる可能

性がある。『萬物聲音』は擬声語の専門書であり、北京官話の「研究せんとする者の参考になす」という目的で編纂された。一方、『北京語の味』は「何等かの意味に於て皆様の北京語研究にお役に立てば此上ない幸ひであると思つて」<sup>6</sup>、多くの分野にわたる中国語と中国の事物を解説したものである。『北京語の味』は「擬音一覧」という節を設置し、特に擬声語を取り上げている。筆者の調べたところ、この二書程多量の擬声語を収載しているものは他にない。

本稿は上記の理由で、『萬物聲音』と『北京語の味』を選び、それらの中の擬声語を検討する。

## 2.2 テキストの紹介

『萬物聲音』は当時陸軍清語通訳官であった瀬上恕治の作で、明治39年（1906年）11月に北京・徳興堂印字局により刊行された。本書の内容は叙文2篇、例書1篇、支那官話合声字母表と支那官話字母反切表各1篇、官話合声発音心得1篇と本文の六章からなる。瀬上恕治は「例書」で、本文の六章について、「第一章に於ては感投詞につき一々解釋をなし其

例証を加へ第二章に於ては人の動作に因り起こる音聲を含めるものを第三章に於ては物體と物體との摩擦により起こる音聲を含めるものを第四章に於ては鳥類の鳴聲第五章に於ては獸類の鳴嘯の聲第六章に於ては蟲類の鳴く音を含める」<sup>7</sup>と記述している。それゆえ、『萬物聲音』は擬声語の専門書であるといえる。

一方、『北京語の味』は大山聖華<sup>18</sup>により編纂され、昭和16年（1941年）8月に北京・中華法令編印館により刊行された。この本は「語學修得の要諦」「會話篇」「語彙篇」「研究篇」「雜録篇」「寫真と繪圖」の6つの部分からなる。『萬物聲音』と比べると、『北京語の味』は中国の当時の社会風俗や文化、生活場面の会話などを記録したものであり、中国語の語彙、文法、修辭言語などを紹介する学習書でもある。「擬音一覧」には89類の自然音を表わす擬声語が挙げられている。

## 3 テキストにおける擬声語

『萬物聲音』と『北京語の味』の「擬音一覧」に載っている擬声語及び自然音、発音表記などを以下に示す。

表1 『萬物聲音』の擬声語

番号	自然音（現象）	漢字表記	ウェード式表記	カタカナ	合声字母
第二章					
(一)	咬耳朵說話	唸々嗑々	CH'Ī CH'Ī CH'A CH'A	チチチヤチヤ	𠄎𠄎𠄎𠄎
(二)	啞叭	啊々啊々	A A	アアー	了了
(三)	嚏吩	啊嚏	A T'I	アチイ	了𠄎
(四)	打呼	呼呼	HU HU	ホウーホウー	𠄎𠄎
(五)	大人哭	鳴兒々々	WUerh WUerh	ウォルウォル	𠄎𠄎
(六)	小孩兒哭	噶喇噶喇	KA LA KA LA	カラーカラー	𠄎𠄎𠄎𠄎
(七)	大人笑聲	嘎々哈哈	KA KA HA HA	カーカーハーハー	𠄎𠄎 𠄎𠄎
	婦人笑聲	哢兒々々	KENerh KENerh	ケルケル	𠄎𠄎・𠄎𠄎
	小孩兒笑聲	嘿兒々々	HELerh HELerh	ヘルヘル	𠄎𠄎・𠄎𠄎
(八)	洋喇叭	嗒々嗒一	TI TI TA	チイチイター	𠄎𠄎𠄎
	洋喇叭	啣兒哢	WENerh WA	/	𠄎𠄎𠄎
(九)	喫煙	吧嗒々々	PA TA PA TA	パタパタ	𠄎𠄎𠄎𠄎
(十)	聽外國人的話	咕拉呱拉	CHI LA KUA LA	チラクワラ	𠄎𠄎𠄎𠄎

(十一)	擤鼻涕(擤鼻子)	吭	HÈNG	ホオン	𠵼
	擤鼻涕(擤鼻子)	啊哼	A HÈNG	アホオン	了𠵼
(十二)	打呵欠打呵勢	啊哈々	A HA HA	アーハハー	了𠵼𠵼
(十三)	咳嗽	喀兒々々	K'Oerh K'Oerh	コールコール	𠵼𠵼
(十四)	吃喝聲 吃	啣吃々々	ANG CH'IH	アンチ	乙𠵼乙𠵼
	吃喝聲 喝	咕啣兒々々	KU LANGerh	クラール	𠵼𠵼
(十五)	抓癢癢	吱々	KUA KUA	クワー	𠵼𠵼
第三章					
(一)	開水壺	嘩喇々々	HUA LA HUA LA	ホワーラーホワーラ	𠵼𠵼𠵼𠵼
(二)	水煙袋	呼嚕々々	HU LO HU LO	ホウロホウロ	𠵼𠵼𠵼
(三)	柳籬掉在井裏	哧噎	PU TÈNG	プトン	ト𠵼
(四)	電閃雷鳴	倏	SHUA	ショワ	𠵼
	電閃雷鳴	嘎喇	K'A LA	カラ	𠵼𠵼
(五)	電閃雷鳴	咕嚕々々	KU LU KU LU	クルクル	𠵼𠵼𠵼
	電閃雷鳴	噶喳	K'A CH'A	カチャー	𠵼𠵼
(六)	錶	噶噠々々	KA TA	カタカタ	𠵼𠵼
(七)	鐘 大	噶兒々々	TANGerh TANGerh	タンル	𠵼𠵼 𠵼𠵼
	鐘 中	噎兒々々	TÈNGerh TÈNGerh	トンル	𠵼𠵼 𠵼𠵼
	鐘 小	噎兒々々	TÈrh TÈrh	トル	𠵼𠵼 𠵼𠵼
(八)	皂鞋	嘎吱々々	KA CHIH	カチ	𠵼𠵼 𠵼𠵼
(九)	洋爐子	焐焐々々	HU HU	ホウーホウー	𠵼 𠵼
(十)	騾子車	唧噥嘎噠	CHI TA KA TA	チタカタ	𠵼 𠵼𠵼𠵼
	騾子車	唧噥剛噠	CHI TANG KANG TANG	チタンカンタン	𠵼 𠵼𠵼𠵼
(十一)	小車子	嗞々啣々	TZU TZU NIU NIU	ツウツウニウニウ	𠵼 𠵼𠵼𠵼
(十二)	廠車	咣噠々々	KUANG TAGN	クワンタン	𠵼 𠵼
(十三)	東洋車	嘎噠々々	KA TA KA TA	カタカタ	𠵼𠵼 𠵼𠵼
(十四)	外國馬車	哧	CH'IH	チイー	𠵼
(十五)	扁擔	嘎吱々々	KA CHIH	カチカチ	𠵼𠵼 𠵼𠵼
	扁擔	喀啞	K'O CH'IH	コチ	𠵼 𠵼
(十六)	擗竹竿子	啪噠	P'A CH'A	パチャー	𠵼𠵼
(十七)	木頭木板掉地	噶噠	KA CH'A	カチャ	𠵼𠵼
	木頭木板掉地	嘩噠	KU T'UNG	クトン	𠵼 𠵼
(十八)	小物件掉地	吧噠	PA TA	パタ	𠵼𠵼
(十九)	打樓梯掉下來	咕噠々々	KU T'UNG	クトンクトン	𠵼 𠵼 𠵼 𠵼
(二十)	磨面	噶噠々々	KA TA	カタカタ	𠵼𠵼
(廿一)	旗子翻風	吧喇々々	P'A LA	バラバラ	𠵼𠵼
(廿二)	裁紙疊紙	哧兒哧兒	CHIHerh	チイルチイル	𠵼
	裁紙疊紙	嘩喇々々	HUA LA	ホウワラ	𠵼𠵼𠵼𠵼
(廿三)	抖樓紙	倏喇々々	SHUA LA	シュアラ	𠵼𠵼
(廿四)	帶琴的風箏	叭々叭々	JÈNG JÈNG	ジオン	𠵼 𠵼
(廿五)	撮石頭	紉々	JÈNG JÈNG	ジオラジオラ	𠵼 𠵼
	撮石頭	柔々	JOU JOU	ジオジオ	𠵼 𠵼
(廿六)	墻倒的	唵喇唵噠嘩噠	HULALA SHILAHUALA	ホウララシイラ ホウアラ	𠵼 𠵼 𠵼 𠵼 𠵼
(廿七)	打大鼓	咚咚々々	TUNG TUNG	トントン	𠵼 𠵼
	打大鼓	咕噠々々	KU LUNG	クロンクロン	𠵼 𠵼 𠵼 𠵼
(廿八)	波浪鼓	嘽嘽兒	PO LANGerh	ポラール	𠵼 𠵼
(廿九)	鈴兒	噠兒々々	TANGerh	タンルー	𠵼 𠵼 𠵼 𠵼
(三十)	鎖上門	唏啣嘩啣	HIS LANG HUA LANG	シランホワラン	𠵼 𠵼 𠵼 𠵼
(三十一)	關上門	吱啣々々	CHIH NIU CHIH NIU	チニニュー	𠵼 𠵼 𠵼 𠵼
	關上門	咣噠	KUANG TANG	クワンタン	𠵼 𠵼

(三十二)	衆人上房下房	咕咚々々	KU TUNG	クトン	ㄍㄨㄊㄨㄥ
	衆人上房下房	唧咚咕咚	CHI TUNG KU TUNG	チイトンクタン	ㄐㄧㄣㄊㄨㄥ ㄍㄨㄊㄨㄥ
(三十三)	火車の哨兒	們兒々々	MENerh	メールメール	ㄇㄟㄟㄟ
(三十四)	火車輪子	呼嚕嚕	HU LO LO	ホウロロ	ㄏㄨㄛㄨㄛ
(三十五)	煙筒冒煙	咕嘟々々	KU TU KU TU	クツウクツウ	ㄍㄨㄊㄨ ㄍㄨㄊㄨ
(三十六)	火車	嘖嘖々々	P'U P'U	プウプウ	ㄆㄨㄨ ㄆㄨㄨ
(三十七)	火輪船の輪子	咕嚕嚕	KU LU LU	クルル	ㄍㄨㄛㄛ
(三十八)	拿棍子打人	爬(呱) 噠	P'A T'A	パタ	ㄆㄚ
(三十九)	盤子碗類碎	咕噠嘩啦	KU TÈNG HUA LA	クトンホウワラ	ㄍㄨㄊㄨㄥ ㄏㄨㄚㄌㄚ
(四十)	風吹樹葉子	倏啦倏啦	SHUA LA	ショワラ	ㄕㄨㄚㄌㄚ
(四十一)	石頭片落上	爬噠	P'A T'A	パタ	ㄆㄚ
	石頭片落上	咕嚕々々	KU LU KU LU	クルクル	ㄍㄨㄛㄛ
(四十二)	石匠鑿石頭	叮啊噹啊	TING A TANG A	チンアータンア	ㄊㄩㄥ ㄚ ㄊㄨㄥ ㄚ
(四十三)	流水	嘩啊	HUA LA	ホウワー	ㄏㄨㄚㄌㄚ
	流水	嘩喇々々	HUA LA HUA LA	ホウワラー	ㄏㄨㄚㄌㄚ ㄏㄨㄚㄌㄚ
(四十四)	雨聲	大 嘩啊	HUA A	ホウワー	ㄏㄨㄚㄌㄚ
	雨聲	小 倏兒々々	SHUAerh SHUAerh	ショワル	ㄕㄨㄚㄌㄚ
(四十五)	雪聲	倏兒々々	SHUAerh	ショワル	ㄕㄨㄚㄌㄚ
(四十六)	電子	啪嗒々々	P'A TA P'A TA	パタパター	ㄆㄚ ㄊㄚ ㄆㄚ ㄊㄚ
(四十七)	風聲	呼鳴々々	HU WU HU WU	ホウウ	ㄏㄨㄨ ㄏㄨㄨ
	風聲	唵唵	SHUA SHUA	ショワショワ	ㄕㄨㄚㄕㄨㄚ
附記	颼颼	颼兒々々	楓楓/呼呼	倏兒倏兒/嗚嗚	
(四十八)	撕布聲	唻兒々々	CH'Herh CH'Herh	チルチル	ㄔㄩㄛ ㄔㄩㄛ
(四十九)	燒爆煤	啾喇啾喇	P'I LA P'A LA	ピラバラ	ㄆㄧㄌㄚ ㄆㄧㄌㄚ
(五十)	東洋屐	呱噠兒々々	KUA TÈNgerh	クワトル	ㄍㄨㄚㄊㄨㄛ
第四章					
(一)	喜鵲	唧々咋々	CHI CHI CHA CHA	チイチイチャチャ	ㄐㄧㄣ ㄐㄧㄣ ㄔㄨㄚ ㄔㄨㄚ
(二)	家雀兒	咖咖唧唧咋咋	CHIA CHIA CHIA CHIA CHA CHIA CHA	チャーチャーチ イチャ	ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ ㄐㄧㄚ ㄔㄨㄚ ㄐㄧㄚ
(三)	老鸛	呱啊々々	KUA KUA	クワークワー	ㄍㄨㄚ ㄍㄨㄚ
附記	老鸛	啊喇啊—啊喇啊	A LA A	アラア	/
(四)	家鴨子	噶々噶々	KA KA KA KA	カアカア	ㄎㄚ ㄎㄚ ㄎㄚ ㄎㄚ
(五)	公雞	根兒根兒根兒	KÊNerh KÊNerh	ケルケルケール	ㄍㄟㄣ ㄍㄟㄣ ㄍㄟㄣ
(六)	母雞	噶々噶蛋	KA KA KA TAN	カカカタ	ㄎㄚ ㄎㄚ ㄎㄚ ㄊㄢ
(七)	雞雛・小雞兒	嗞兒々々	TZUerh TZUerh	ツルツル	ㄊㄨㄛ ㄊㄨㄛ
(八)	仙鶴	嘎—嘎—	KA KA	カーカー	ㄎㄚ ㄎㄚ
(九)	老雕	吱兒—吱兒—	CHIHerh CHIHerh	チル—チル	ㄔㄩㄛ ㄔㄩㄛ
(十)	鷹	嗞兒—噴兒噴兒	TZUerh HOerhHOerh	ツル—ホルホル	ㄊㄨㄛ ㄏㄨㄛ ㄏㄨㄛ
(十一)	雁	咯兒噶—咯兒噶—	KOerhKA KOerhKA	コルカーコルカ	ㄍㄨㄛ ㄎㄚ ㄍㄨㄛ ㄎㄚ
(十二)	黃鸝	咕儿咕儿	KUerhKUerh	クルクル	ㄍㄨㄛ ㄍㄨㄛ
(十三)	燕子	噴儿噴儿	TSÊerh TSÊerh	ツォルツォル	ㄊㄨㄛ ㄊㄨㄛ
(十四)	鸚哥	咋々咋々/咋-咋-	CHA CHA	チャ チャ	ㄔㄨㄚ ㄔㄨㄚ
(十五)	夜猫子	咕々呢嗷儿	KU KU NI Aoerh	ククニアオル	ㄍㄨ ㄍㄨ ㄋㄧ
(十六)	鸽子	咕嘟—咕嘟—	KU TU KU TU	クートクート	ㄍㄨ ㄊㄨ ㄍㄨ ㄊㄨ
第五章					
(一)	貓	咪嚶々々	MI YAO	ミヤオミヤオ	ㄇㄧ ㄢㄠ
(二)	大貓和耗子	呢啣兒	NI YAOerh	ニヤオル	ㄋㄧ ㄢㄠ
	大貓和耗子	噶吱々々	KA CHIH KA CHIH	カチカチ	ㄎㄚ ㄔㄧ ㄎㄚ ㄔㄧ
	大貓和耗子	吃兒吃兒	CH'Herh	チルチル	ㄔㄩㄛ ㄔㄩㄛ
	大貓和耗子	嗞	TSU	ツ	ㄊㄨㄛ

(三)	狗	噉々噉々	TSANG TSANG	ツァンツァン	ㄗㄨㄤ ㄗㄨㄤ
(四)	狗	旺旺々々	WANG WANG	ワンワン	ㄨㄤ ㄨㄤ
	狗	啍々啍々	PANG PANG	パァンパァン	ㄆㄤ ㄆㄤ
(五)	馬	呼兒々々	Huerh Huerh	ホウルホウル	ㄏㄨㄟㄨㄟ
(六)	馬蹄	爬噠々々	PA TA PA TA	パタパタ	ㄆㄚ ㄊㄚ
	馬蹄	咕噠爬噠	CHI TA PA TA	チタパタ	ㄑㄩ ㄊㄚ ㄆㄚ ㄊㄚ
(七)	猪	吱兒吱兒	CH'Herh CH'Herh	チルチル	ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ
(八)	驢	哼啊々々	ÈNG A ÈNG A	オンアオンア	ㄨㄥ ㄞ ㄨㄥ ㄞ
(九)	老猴兒	歐兒々々	Ouerh Ouerh	オウルオウル	ㄠ ㄠ ㄠ ㄠ
(十)	牛	們兒們兒	MENerh	メル	ㄇㄟ ㄇㄟ ㄇㄟ ㄇㄟ
(十一)	山羊	咩々	MIEH	ミュ ミュ	ㄇㄟ ㄇㄟ
(十二)	老虎	鳴一鳴一	WU WU	ウーウー	ㄨ ㄨ
(十三)	狼	嗷一嗷一	AO AO	アヲーアヲー	ㄞ ㄞ
(十四)	狗熊	歐兒嗷兒	Ouerh Ouerh	オウルアヲル	ㄠ ㄠ
(十五)	駱駝	嗷兒嗷兒	AOerh Aoerh	オヲルアヲル	ㄠ ㄠ
第六章					
(一)	蜜蜂	唎々唎々	JÈNG JÈNG	ジオンジオン	ㄐㄩㄥ ㄐㄩㄥ
(二)	螞蜂	嚙嚙々々	WÈNG WÈNG	ウオンウオン	ㄨㄥ ㄨㄥ
(三)	蒼蠅	唎々唎々	JÈNG JÈN	ジオン	ㄐㄩㄥ ㄐㄩㄥ
(四)	蚊子	啞啞々々	YING YING	インイン	ㄩㄥ ㄩㄥ
(五)	蛤蜊	噉一噉一	KUA KUA	クァークァー	ㄑㄨㄚ ㄑㄨㄚ
(六)	蝸々兒	蝸々兒	KUO KUOerh	クオクオール	ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ
(七)	蝸了兒	蝸蝶兒	FU TIEHerh	フウテール	ㄑㄩㄟ ㄊㄟ

『萬物聲音』の第三章の(四十七)と第四章の(三)では、一部の擬声語の項目に「附記」を付けている。「附記」には、その擬声

語と似た別の擬声語が別添されている。それらの擬声語は発音表記が付いておらず、例文もない。

表2 『北京語の味』の擬声語

セクション	自然音(現象) <sup>19</sup>	擬声語(注音符号)	ウェード式表記 <sup>20</sup>
一	狗(犬)	ㄨㄤ ㄨㄤ	WANG WANG
	貓	ㄋㄧㄠ ㄋㄧㄠ	NIAO NIAO
	喧嘩する時	ㄑㄨㄚ ㄑㄨㄚ ㄩㄠ	FUFUèrhYAO
	鷄	ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ	KOèrh KOèrh KOèrh
	小鷄兒(ヒヨコ)	ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ	CH(j)A CH(j)A
		ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ	KA KA
	家雀兒(雀)	ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ	CH(j)I CH(j)I
		ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ	CH(j)IA CH(j)IA
	牛	ㄨㄥ ㄨㄥ	WÈNG WÈNG
	猪	ㄏㄥ ㄏㄥ	HÈNG HÈNG
	鴨子(アヒル)	ㄑㄨㄚ ㄑㄨㄚ	KUA KUA
	鳴鴨(からす)	ㄞ ㄞ ㄞ ㄞ	A YI A YI
	雁	ㄑㄨㄚ ㄑㄨㄚ ㄑㄩㄟ	KUA KUA CH(j)I
		ㄨㄠ	OU AO
		ㄨㄠ	OU OU
	耗子(鼠)	ㄑㄩㄟ ㄑㄩㄟ	CH(j)I CH(j)I
ㄊㄠ ㄊㄠ		TSèrh TSèrh	
騾子(馬と驢馬の雜種)	ㄞ ㄞ	ÈA ÈA	

	驢 (らば)	ㄙㄩˊ ㄙㄩˊ	ÈA ÈA
	馬	ム…ム	S(SSU) …S(SSU)
	蟬了兒 (蟬)	ㄇㄧㄥˊ ㄇㄧㄥˊ	J(IH)êrhI J(IH)êrhI
	伏天兒 (蝸)	ㄉㄨㄛˊ ㄇㄞˊ	FUT'IANêrh
	蝸々兒 (蟋蟀)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	Têrh Têrh
	蝸々兒 (キリギリス)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	KUO KUO
		ㄆㄧㄥˊ ㄆㄧㄥˊ	TSêrh TSêrh
	金鐘兒 (鈴虫)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	J(IH)êrh J(IH)êrh
	蛤蟆 (蛙)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	KUA KUA
	蝸蟻 (蚯蚓)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	J(IH)êrhI J(IH)êrhI
	蚊子 (蚊)	ㄇㄧㄥˊ <sup>21</sup>	JING
	蜂	ㄇㄨㄥˊ ㄇㄨㄥˊ	WÈNG WÈNG
	小孩兒 (子供)	ㄍㄨㄛˊ ㄌㄞˊ (嘎拉嘎拉)	KA LA
		ㄇㄨㄛˊ ㄇㄨㄛˊ (哇)	WA WA
二	打哈息 (あくび)	ㄉㄞˊ ㄆㄞˊ	HA TS
	打嗝 (しゃっくり)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	Kêrh Kêrh
	打喷嚏 (くしゃみ)	ㄩˊ ㄍㄨㄛˊ	A T'IEH
	打飽嗝兒 (おくび・ゲツブ)	ㄉㄞˊ	O
	打招呼 (いびき)	ㄉㄞˊ ㄌㄞˊ	HU LU
	唾沫 (つばを吐く)	ㄉㄞˊ ㄇㄞˊ	T'UEI
	咳嗽 (せき)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	K'êrh K'êrh
	撒尿 (小便)	ㄉㄞˊ ㄍㄨㄛˊ	HUA HUA
	接吻	ㄆㄧㄥˊ	TSêrh
	叫狗的 (犬) をよぶ時	ㄆㄧㄥˊ ㄆㄧㄥˊ	TSA TSA
	巴結嘴 (唇) をならす	ㄍㄨㄛˊ ㄆㄧㄥˊ	PIA TSI
	放屁 (おなら)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	PU PU
		ㄍㄨㄛˊ…ㄍㄨㄛˊ	PU…êrh
		ㄆㄧㄥˊ	TSIS
菌ぎしり	ㄍㄨㄛˊ ㄑㄩㄥˊ	KA CH(IH)J(IH)	
三	大砲	ㄍㄨㄛˊ ㄑㄨㄥˊ	KU TUNG
	小槍 (小銃)	ㄍㄨㄛˊ…ㄍㄨㄛˊ	SHU…êrh
		ㄑㄩㄥˊ ㄑㄩㄥˊ	P'êrh P'êrh
	機關槍	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	TA TA TA
	飛機	ㄇㄨㄥˊ ㄇㄨㄥˊ	WENG WENG
	火車 (汽車)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	KANG TANG
	汽車 (自動車)	ㄨㄟ ㄨㄟ ㄨㄟ	CH'(IH)CH'(IH)CH'(IH)
	摩托車 (自動自転車)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	T'UNG T'UNG T'UNG
	大敵車 (大) 八車	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ…	KA TUNG…
	電車の軋る音	ㄆㄧㄥˊ…ㄍㄨㄛˊ	TS…êrh
	電車の鈴	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	TANG TANG
	電鈴 (ベル)	ㄍㄨㄛˊ…ㄍㄨㄛˊ	TANG…êrh
四	鼓 (太鼓)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	TUNG TUNG
	打銅鑼	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	TUANG TUANG
		ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	TANGêrh TANGêrh
	吹笛	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	Mêrh Mêrh Mêrh
		ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	Têrh LÈNG
	胡琴 (胡弓)	ㄆㄧㄥˊ ㄆㄨㄛˊ	TSêrh TSUêrh
	喇叭	ㄇㄨㄛˊ ㄇㄨㄛˊ	WA WA
九音鑼	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	TING TANG	
打梆子 (拍子木)	ㄍㄨㄛˊ ㄍㄨㄛˊ	PANG PANG	



	要波浪鼓兒	ㄅㄛ ㄅㄛ	Pêrh Lêrh
	喚頭	ㄉㄛ ㄉㄛ	TS'êrh TS'êrh
		ㄉㄨㄥ	JUNG
	打冰盞兒	ㄊㄩㄥ ㄉㄨㄥ ㄊㄩㄥ ㄉㄨㄥ	TING TANG TING TANG
ㄊㄩㄥ ㄊㄩㄥ ㄉㄨㄥ		TING TING TANG	
ㄎㄨㄥ ㄎㄨㄥ ㄎㄨㄥ ㄎㄨㄥ ㄎㄨㄥ ㄎㄨㄥ		KÊNG KA KÊNG KA KÊNG KÊNG KA	
五	雨聲 小	ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	SHUA SHUA
	雨聲 大	ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	P'I LA P'I LA
	風聲 大	ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	SHU SHU
	風聲 小	ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	SU SU
	雷聲	ㄌㄨㄥ ㄌㄨㄥ ㄌㄨㄥ ㄌㄨㄥ	KA LA KU LU
	水流聲	ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	HUA LA
	瀑布(瀧)	ㄖㄨㄥ…	HUA…
	湯のわく音	ㄌㄨㄥ ㄌㄨㄥ	KUA LA
	風が葉にあたる音	ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	SHUA SHUA
	雨が傘にあたる音	ㄖㄨㄥ ㄌㄨㄥ ㄖㄨㄥ ㄌㄨㄥ	P'A TA P'A TA
	ものの煮える音	ㄌㄨㄥ ㄌㄨㄥ	KU TU
	六	物之下落声(物を落とした時)	ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ
叫門聲(戸を叩く)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	P'A P'A
水中投石(窓戸のあたる音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	PU TUANG
屋門關閉聲		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	K'A T'A
瓷器摩擦聲		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	TUANG TUANG
鐵物相擊聲(金物)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	T'UANG T'UANG
拍掌聲(拍手の音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	P'A P'A
		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	P'Aêrh P'Aêrh
筐籬菠豆聲(笊にあたる豆の音)		ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	SHA SHA
鋸木聲(木を鋸く音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	TS'êrh TS'êrh
裂布聲(布を裂く音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	TS'êrh TS'êrh
鉋木聲(鉋をかける音)		ㄖㄨㄥ ㄖㄨㄥ	TS'êrh TSAêrh
撒紙聲(紙を破る音)		ㄌㄨㄥ	SI
釘鐵釘聲(釘を打つ音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	T'ANG T'ANG T'ANG
鋼筆寫字聲(ペンの音)		ㄌㄨㄥ ㄌㄨㄥ	SISI
切菜聲(庖丁で切る音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	TS'êrh TS'êrh
剪子絞布聲(鋏で布を切る音)		ㄖㄨㄥ	TSA
剪子絞紙聲(鋏で紙を切る音)		ㄌㄨㄥ	SA
磨刀聲(砥石の音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	TS'ÊNG TS'ÊNG
把嘴巴聲(頬を打つ音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	P'A P'A
打後背聲(背中などを叩く音)		ㄊㄨㄥ ㄊㄨㄥ	T'UANG T'UANG
石の碎ける音		ㄊㄨㄥ(碎)	P'ÊNG

『北京語の味』では、日本語である自然音(現象)の項目だけがあるが、セクションの一～六がそれぞれいかなる自然音の分野であるかは明示されていない。

#### 4 擬声語の特徴

ここでは主として、語形の形態構造、意味の特徴(意味分野)から『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語の特徴を検討する。

#### 4.1 擬声語の発音表記

『萬物聲音』の擬声語の「音解」<sup>22</sup> - 発音表記は日本語のカタカナ、ウェード式ローマ字、王照の官話合声字母<sup>23</sup>からなる。この3種の発音表記形式のゆえに、本書は「きわめて稀な珍本」<sup>24</sup>であると見なされる。

カタカナ表記は日本の中国語学習によく使われる。ウェード式ローマ字表記法は第二次世界大戦終了までの日本の中国語教育に採用された一般的な方法である。官話合声字母は13の省内に普及し、修身・倫理・歴史・地理・植物・動物・外交など多方面にわたって編纂・刊行された官話合声字母の教科書が6万余部販売された<sup>25</sup>ため、当時の中国で、北京官話の発音を記録する方法として影響力を持ち、広く使用されていたものである。それゆえ、この「音解」は当時の擬音擬声語の実態を反映するとともに、日本人の中国語学習の状況を知ることに関与する。

『北京語の味』に使われた表記方法も3つある。それは日本語のカタカナ、ウェード式ローマ字、注音符号である。注音符号は当時普及していた表音字母で、中華民国政府により1918年に発布されて以降何回かの修訂・補訂があった<sup>26</sup>。

#### 4.2 擬声語の形態構造

一般的に中国語の1つの漢字の読み方が1音節に相当している。その音節の数によって、1音節語、2音節語、3音節語、4音節語というように、語の音形式を基本的な型に分け、A、B、C、Dなど<sup>27</sup>で音節の種類を示すと、いくつかの型をわけることができる。例えば、A型、AB型、ABB型、ABAB型、ABCD型などである。中国語擬声語の音形式は多種多様である。

『萬物聲音』と『北京語の味』に記載されている擬音擬声語の音形式は、語形の各音節をA、B、C、Dで示すと、次の11種の型になる。

A型、AA型、AB型、AAA型、AAB型、ABB型、AABB型、ABCB型、AABC型、ABCD型、AAAB型

本論では、それらの型の特徴によって、基本型と特殊型<sup>28</sup>に分類して検討する。だが、基本型或は特殊型には、それぞれ重複型（例：AAAA型、ABAB型）と複合型（例：ABBABCB型、ABABAAB型）などがある。

また、中国語には、聴覚で音変した後のある字音が独立の音節を保たなくなる場合がある。特に北京官話の兒化現象は代表的である。これは接尾辞の「兒」が「ほかの音節につく時、前の音節の一部が抜け落ちたり変化したりする」<sup>29</sup>という音変現象である。そのため、本論では擬声語の型を分類する時、兒化の擬声語の「兒」を1音節としない。

さらに、『萬物聲音』でも、『北京語の味』でも、同一の擬声語が何回も使われる場合がある<sup>30</sup>。例えば、『萬物聲音』の「啗兒々々」（第三章の七と二十九）、「爬噠」（第三章の三十八と四十一）、「嘩啊」（第三章の四十三と四十四）であり、『北京語の味』の「りりり」（家雀兒（雀）・耗子（鼠））、「せY せY」（騾子（馬と驢馬の雑種）・驢（ろば））などである。ほかに、『萬物聲音』で、漢字によって表示される擬声語は文字と発音が完全に同じであるものだけでなく、「倏喇々々」と「倏啦倏啦」のように、一部の用字が異なるものもある。表3では、用字と発音が同じで、何回も使われるものは一回とする。



#### 4.2.1 擬声語の形態の特徴

A型、AA型、AAA型は各自の独立の品詞を持っている。例えば、A型の「嘎-嘎-」は自然音の繰り返しを表わすのに対して、AA型の「嘎嘎」は自然音の連続で、1回の模倣現象を表す。重畳形のAAAA型<sup>31</sup>、ABAB型、及び特殊型のAAA型とも連続する自然音<sup>32</sup>を表わすものであるが、AAAA型とABAB型はそれぞれA(A)型とAB型の重畳形と見なされるため、AAAA型をAA型に、ABAB型をAB型に入れて分類する。「その他」の型の中には、「咕啞嘩啦」、「ㄍㄚ カㄚ ㄍㄨ カㄨ (ga la gu lu<sup>33</sup>)」のようなABCD型、「噶々噶蛋」のようなAAAB型、「咕々呢嗷兒」のようなAABC型などの特殊型があり、「唸喇唸唏嘩嘩」のABB+ABCB型、「ㄍㄨ ㄍㄚ ㄍㄨ ㄍㄚ ㄍㄚ ㄍㄚ ㄍㄚ ㄍㄚ (geng ga geng ga geng geng ga<sup>34</sup>)」のABAB+AAB型のような複合型がある。特殊型も複合型も、語形は複雑であるが、その擬声語は1種の自然音を表わす。

具体的に各型の擬声語の形態構造の特徴を説明する前に、『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の各型の擬声語の語数及び総語数に占める比率を次の表4に示した。

『萬物聲音』の擬声語の型を大まかに分類すると、2音節の擬声語はAA型とAB型が多く、これを合わせると73.8%で4分の3を占

めている。しかし、4音節の重ね型の擬声語を除くと、AA型とAB型の比率はそれぞれ25.4%と18.3%である。そのため、ABAB型はAB型より多く使われていることがわかる。3音節重ね型のAAA型は「根兒根兒根兒」と「咖咖咖」の2つのみである。この「咖咖咖」は組み合わせ型の部分として使われ、複合型擬声語「咖咖咖唧咋唧咋」が載せられている。1つだけあるAABC型の「咕々呢嗷兒」は兒化語である。

一方、『北京語の味』は、基本型のAABB型、ABCB型と特殊型のABB型、AABC型、AAAB型はない。比率のトップスリーの型は『萬物聲音』と同じで、それらはAA型、AB型、A型である。しかし、重複型のAAAA型とABAB型の分布には大きい相違が見える。自然音の繰り返しと連続の現象には、判明しにくい場合があるかもしれないため、重複型の使用の自由度が高くなることがある。そして、繰り返しのA型と連続の自然音を表わすAA型は、使用の規則性が明確ではない。

ABCD型は『萬物聲音』にも『北京語の味』にも1つだけある。語形の形態構造から見ると、『萬物聲音』と『北京語の味』に載っている中国語擬声語は同じ傾向を持っている。二者における擬声語の形態類型は多少異なるが、主な音形式の状況は一致している。

表4 『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の音形式の分布情況

テキスト の語数	型	A	AA (AAAA)	AB (ABAB)	AAA	AAB	ABB	AABB	ABCB	AABC	ABCD	AAAB
	萬物 聲音	語数	11	44(12)	49(26)	2	1	5	3	8	1	1
	比率 (%)	8.7	34.9(9.5)	38.9(20.6)	1.6	0.8	4	2.4	6.3	0.8	0.8	0.8
北京語 の味	語数	16	37(0)	26(3)	6	4	0	0	0	0	1	0
	比率 (%)	17.8	41.1	28.9(3.3)	6.7	4.4	0	0	0	0	1.1	0

注：AA (AAAA) の表示はAAAA型の擬声語をAA型に含めているという意味である。例えば、語数の43 (12) 及び比率の34.9 (9.5) は前の数字はAAを示し、後ろの ( ) 内はAAAAである。AB(ABAB) も同様である。

表5 『萬物聲音』の兒化擬声語

萬物聲音	型 (語数)	A(11)	AA(44)	AB(49)	AAA(1)	総数
	兒化の擬声語の語数	2	21	8	1	32
	型の語数に占める比率 (%)	18.2	47.7	16.3	/	/
	総語数に占める比率 (%)	1.6	16.7	6.3	0.8	25.4

表6 『北京語の味』の兒化擬声語

北京語 の味	型 (語数)	A(16)	AA(38)	AB(25)	AAA(6)	総数
	兒化の擬声語の語数	5	10	4	2	21
	型の語数に占める比率 (%)	31.2	26.3	16	3.3	/
	総語数に占める比率 (%)	5.6	11.1	4.4	2.2	24.4

#### 4.2.2 兒化擬声語

北京官話の学習書である『萬物聲音』と『北京語の味』は、擬声語の兒化現象が顕著である。まず、表3により、両書の兒化語の擬声語を抜き出し、その比率を計算したものを表5と表6に示す。

上の表にあげたA型、AA型、AB型、AA A型のほかに、AABC型（例：『萬物聲音』の「咕々呢嗷兒」）とAAB型（例：『北京語の味』の「ㄐㄨㄛㄨㄛㄨㄛ」）の兒化擬声語もあるが、それぞれは一つだけであるため、表5と表6に挙げていない。

表5、表6をみると、『萬物聲音』と『北京語の味』は、兒化擬声語が総数に占める比率がそれぞれ25.4%と24.4%で、大体一致している。数から見ると、AA型、AB型などの兒化擬声語が多く存在することがわかる。つまり、2音節の兒化擬声語はかなり多い。『萬物聲音』の中の「根兒根兒根兒」は雄鳥の鳴き声を模倣するものとして、一回の連続の自然音を表わすため、A型或はAA型の複数型とはせず、AAA型とする。また、AA型の「蝸々兒」とAB型の「啞啞兒」、「蚨蝶兒」などは語の最後の音節が「兒化」するのに対して、AB型の「咯兒噶」と「啞兒啞」は前部が兒化音になる。「味」及び兒化語の「味兒」は両方とも載っている。また、「嗷」「鳴」「噉」なども兒化語の形式がある。これらの状況は

『北京語の味』も同様である。

『萬物聲音』と『北京語の味』では、兒化した擬声語の語数が異なるが、兒化語の占めている比率は同じ傾向を持つ。詳細的にみると、『萬物聲音』のAA型の擬声語では、兒化語はほぼ半数を占める。それに対して、『北京語の味』は約4分の1と差がある。AB型の兒化語の分布にも相違があるが、大きくない。他に、A型、AAA型と3音節以上の兒化した擬声語は多くないため、取り上げない。

以上のように、『萬物聲音』と『北京語の味』を比較すると、擬声語の音形式の特徴は両者の相似点が挙げられる。つまり、両者の擬声語の形態の特徴は統一性があるということである。『萬物聲音』と『北京語の味』のみの比較では断言できないが、近代日本人の学習した中国語擬声語の形態の特徴、さらに中国語擬声語の実態の一面を知ることができた。しかし、その実態と現実の中国語を対比すると、語の特徴には差異があることが予見できるであろう。

#### 4.3 擬声語の意味分野

天沼寧（1984）の『擬音語・擬態語辞典』では、擬声語の定義を次のように示している。

擬音語とは、人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、ものを飲んだり、平手

でたいたたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音、また、自然界に自然に発する音響や、無生物が、いわば自然に、あるいは、外力の作用を受けて発する音響を、音声で表現した言葉である<sup>35</sup>。

天沼（1984）の定義によれば、擬声語は人間と人間以外の生物の声或は音、自然の音響、動作の音響などの分野にわけられる。擬声語の意味分野の分類方法は日向茂男（1991）<sup>36</sup>、武田みゆき（2000）<sup>37</sup>、平弥悠紀（2005）<sup>38</sup>なども提示している。方法は多々あるが、大差はない。

ゆえに、本論はそれらの研究を参考として、擬声語の意味分野を「声」<sup>39</sup>による「生物が発する声」と「音」による「動作に関わる音」、「無生物が発する音」、「物と物とが作用して生じる音」の4つの種類に分ける。つまり、声と音の区別に基づき、意味分野を人、

動物、無生物、動作などに関するものに分ける。さらに細かい下位分類も分かれる。例えば、平弥悠紀（2005）で、「動作に関わる音」の分野では、「息を吹く」や、「吐く」、「喉を鳴らす」、「飲む・食べる」、「踏みつける」などが動作によって発するという自然音に属する。

『萬物聲音』と『北京語の味』では、擬声語は自然音の性質（擬声語の意味分野）によって集められている。例えば、『萬物聲音』の「例書」<sup>40</sup>の紹介したように、各章の擬声語が対応する自然音の種類は異なる。自然音を発するものの性質によって、『萬物聲音』の擬声語の意味分野は人の声、動物の声、無生物が発する音、自然物の音、物体と物体の作用によって発する音、動作に関わる音などに分けることができる。それらの分野においての擬声語は音形式の型別によって、いくつかの下位分類にまとめられる。

表7 意味分野による『萬物聲音』の擬声語

意味分野	型	A	AA(AAAA)	AB(ABAB)	その他 <sup>41</sup>
人の声		吭	嘎々、哈々、啊々啊々、喂兒々々、嘿兒々々	鳴兒々々、噶喇噶喇	嗒々嗒々(AABB型)、咕拉呱拉(ABCB型)
動物の声		嘎-、吱兒-、嗷兒、咋-、嗷、嗷-	咩々、蝸々兒、噶々噶々、根兒根兒根兒、嗷兒々々、呼兒々々、歐兒々々、嗷嗷々々、唳唳々々、咧々咧々、旺旺々々、噉々噉々、唧々唧々、啾々、咋々咋々、嘖兒嘖兒、咕兒咕兒、嘖兒嘖兒、吃兒吃兒、吱兒吱兒、嘖兒嘖兒、嗷兒嗷兒	噶吱、呱啊々々、咕啞-咕啞-、咪嚶々々、哼啊々々、呢啞兒々々、蚪蝶兒、咯兒噶-咯兒噶-、歐兒噶兒	唧々咋々(AABB型)、啊喇喇-啊喇喇(ABB型)、咕々呢噉兒(AABC型)、噶々噶蛋(AAAB型)、咖咖咖唧咋唧咋(AAA型+ABAB型)
無生物が発する音			噹兒々々、噹兒々々、噹兒々々、焔焔々々、嘖嘖々々、唛兒々々、咚々々々、嘖兒々々	喀唛、嘩喇々々、呼嚕々々、噶噠々々、咣噠々々、噶嗒々々、噶吱々々、吧喇々々、唛喇々々、咕噠々々、嘖唛兒	唧噠噠噠、唧噠剛噠(ABCB型)、嗷々嗷々(AABB型)、咕嚕嚕、呼嚕嚕(ABB型)
物体と物体の作用によって発する音			綉々、柔々	哧噠、爬噠、噶噠、嘩噠、吧噠、咣噠、咕嚕々々、呱噠兒々々、啪噠、咕噠々々、噶噠々々、唛兒唛兒、嘩喇々々、倏唛倏唛、吱咄々々	叮啊噠啊、咕噠吧噠、唏唧嘩唧(ABCB型)、咕噠嘩噠(ABCD型)

自然現象に関わる音	條	嘹嘹、颼颼、颼颼、呼呼、嗚嗚、颼兒々々、條兒條兒	嘎喇、嗚喳、嘩啊、咕嚕々々、嘩喇々々、啣啣々々、呼嗚々々、咕啣々々	啣喇啣喇（ABCB型）、啣喇喇啣啣啣啣（ABB型+ABCB型）
動作に関わる音	唻	呼呼、唻々、唻兒々々、	啊嚏、啊哼、吧嚏々々、咕啣兒、啣吃々々、咕啣々々	啊哈々々（ABB型）、啣啣啣啣（ABCB型）

『萬物聲音』と異なり、『北京語の味』には、擬声語の意味分野に関する説明はない。6つの部分は漢字の数字で標記される。とはいえ、各部分の擬声語の特徴から見ると、それらの意味分野はそれぞれ動物の声（一）、人の声

（二）、無生物が発する音（三）、物体と物体の作用によって発する音（四）、自然現象に関わる音（五）、動作による音（六）などに分けていることがわかる<sup>42</sup>。

表8 意味分野による『北京語の味』の擬声語

型 意味分野	A	AA(AAAA)	AB(ABAB)	その他
動物の声	ム…ム、日ム	カ儿 儿儿、ういん ういん、ムム ムム、 《Y 《Y、《MY 《MY、《Mて 《Mて、フム フム、4Y 4Y、4I 4I、4IY 4IY、日儿 日儿、日儿I 日儿I、P儿 P儿、YI YI、せY せY、ヌヌ、メウ メウ	ヌム、ムムム 1ヨ儿	《MY 《MY 4I (AAB型)、《て儿 《て儿 4て儿 (AAA型)
人の声	て、去ム、P儿、 クム…儿、PIム	MY MY、《儿 《儿、ウ儿 儿儿、フム Y フMY、PY PY、クム クム	《Y 为Y、フY P、Y 去Iせ、フム 为ム、ウ IY PI、《Y 虫日	ムムムムIム (AAB型)
無生物が発する音	フム…儿、P… 儿、クウ…儿	タ儿 儿儿、ムム ムム、クウ クウ	《M 为ムム、《ウ 为ウ、 《Y 为ムム…	クY 为Y 为Y、イ イ ィ、去ムム 去ムム 去ムム (AAA型)
自然現象に関わる音	フMY…	フMY 为MY、フム 为ム、ムム ムム、 フMY 为MY	フMY 为Y、《MY 为Y、 《M 为ム、タI 为Y 为 I 为Y、为Y 为Y 为 Y 为Y	《Y 为Y 《M为ム (ABCD型)
物体と物体の作用によって発する音	日ムム	クムム 为ムム、クムウ 为ムウ、クウ 儿 为ウ儿、MY MY、ウウ 为ウ、 ウ儿 为儿	カ儿 为ム、P儿 为ム儿、 カIム 为ウ、ウ儿 为儿、 カIム 为ウ 为Iム 为 ウ	ム儿 ム儿 ム儿 (AAA)、カIム 为 Iム 为ウ (AAB)、 《ム 《Y 《ム 《 Y 《ム 《ム 《Y (ABAB+AAB)
動作による音	ムI、PY、ム Y、タム	タY 为Y、クムウ 为ムウ、去ムウ 去ムウ、为Y儿 为Y儿、フY 为Y、 ウ儿 为儿、ムIムI、ウム 为ム、为 Y 为Y	ウム 为ムム、クム 为ム ウ、ウY 为Y、P儿 PY儿	去ウ 去ウ 去ウ (AAA)

擬声語の意味分野を「声」と「音」に大きく二分する上で、平弥悠紀（2005）は「音」について、その「境界線を明確にするのは難しい」<sup>43</sup>と述べている。もう一步進んで、「特に「無生物が発する音」、「物と物が作用し

て生じる音」の線引きをどこにするかについては、問題が残されている」としている<sup>44</sup>。本論でも、「人の声」と「動作に関わる音」をはっきり区別できないことがある。例えば、いびきをかく、くしゃみをする、はなをかむ、

咳をするなどのような人の「動作に関わる音」は主に人の身体音である。これらは人の話し声、笑い声などとの区別は難しい。しかし、「飲む・食べる」、「踏みつける」のような動作の音は判断できる。

また、「無生物が発する音」であるか、「物と物とが作用して生じる音」であるかの判別にも問題がある。たたくことや、裂けること、投げることなどは物と物との作用の表現とされるが、その方法によると、自然音の意味分野を確定することは困難である。例えば、(旧式の)時計の「囁々々々」の振動音や、太鼓の「咚咚々々」「クメ丸 クメ丸」のたたく音などは「無生物が発する音」と見なすこともできる。それに比べると、「撮石頭」(石を投げること)の音を模倣する「紐々」と「柔々」、磨刀聲(砥石の音)(ちム ちム)、鐵物相撃聲(金物)(去メ丸 去メ丸)の摩擦音或は衝突音を模倣したものは「物と物とが作用して生じる音」を表わすとはっきりしている。

意味分野の境界線がないと言えるため、はっきりとすべての擬声語の意味分野を区別することは難しい。だが、大ざっぱに見ると、型別にどのような意味分野の偏りがあるかという研究は、「共通の性質を備えた語群を認めること」と擬声語の音象徴の関係を明らかにすることに対して有意義であろう。

#### 4.4 擬声語の意味分野と音形式の対応情況

擬声語の意味分野を型別に見ると、『萬物聲音』の場合、「吭」、「倏」、「唳」の三つを除き、A型の語はほとんど「動物の声」である。また、AA型(重疊型のAAAA型を含む)も「動物の声」が最も多い。他の分野の情況に比べると、語数の多寡がはっきりわかる。AB型(重疊型のABAB型を含む)は普遍的に使われ、意味分野の型別による偏りが小さい。A型とAA型とAB型以外の擬声語はどの

分野にも用いられるが、語数が少ないため、使用傾向を明らかにするのは困難である。

意味分野から、擬声語の型別の情況を説明すると、①「人の声」、②「動物の声」、③「無生物が発する音」、④「物体と物体の作用によって発する音」、⑤「自然現象に関わる音」、⑥「動作に関わる音」に最も多く見られる擬声語の型別は、①②がAA型(AAAA型)で、③～⑥がAB型(ABAB型)である。『萬物聲音』では、「無生物が発する音」と「物体と物体の作用によって発する音」の分野にA型の擬声語はない。

一方、『北京語の味』の各型はすべての意味分野にある。具体的に言えば、A型は「人の声」、「無生物が発する音」と「動作による音」の分野に多いため、集中性が顕著ではない。AB型の使用率はA型と近いが、特にAB型の擬声語は「動物の声」の分野に一番少ない。それに対して、AA型は「動物の声」の分野に最も多く、はっきりした使用傾向を持っている。「その他」の型別の分布情況は『萬物聲音』と似ている。

以上から、AA型とAB型は『萬物聲音』と『北京語の味』で、最も頻繁に使われる型として、意味分野による使用傾向が似ている。また、自然音分野の「人の声」、「自然現象に関わる音」と「動作による音」にはすべての型の擬声語が見られ、バランスのとれた使用の傾向もあるようである。従って、意味分野と音形式の対応関係はそれらの分布に存在する。

## 5 中国語の視点から見た中国語関係書における擬声語の特徴

尾崎実「清代北京語の一斑」で、清代の北京語の姿の一斑として清末期に出版された北京語教科書の『官話類編』の語彙の量と性



質を分析して、『兒女英雄伝』<sup>46</sup>の北京語と比較している。結論として、『官話類編』に出現する並列記述の語彙に、北京語は約80%を占めているとした。そして、清末期の教科書は現代の北京語研究にとっても、「大きな役割をはたし、有用なヒントを与えてくれるものである」<sup>47</sup>と述べている。

本論は代表的な学習書である『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語の形態構造や語義などの特徴を検討した。その特徴は当時の中国語擬声語も持っていたのであろうか。つまり、近代日本人の学習した中国語擬声語と当時の中国の資料に載っている擬声語はどのような異なりを持っていたのであろうか。次に、『萬物聲音』と『北京語の味』の

擬声語を北京語の代表的資料である『兒女英雄伝』と比較してみよう。

『兒女英雄伝』は北京語で書かれており、清末頃の北京語の代表的な文献であることは定説になっている。『兒女英雄伝』は近代白話の使用が広がりつつあった時代のもので、(評話)講談体の読み物であるが。会話体の『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の例は『兒女英雄伝』にも見られるかもしれない。

野口宗親(1993)<sup>48</sup>は『兒女英雄伝』に出てくる擬声語の調査と分析を行った。野口(1993)の集めた擬声語は次のようであった<sup>49</sup>。

A型・16(56)\*:

吧(7), 嚙(2), 啗・味(8), 嚙(2), 啞(1), 轟(6), 呸(2), 嘆(8), 嚙(1), 鏗(3), 啞(4), 喇(4), 嗖(5), 騰(1), 噲(1), 吱(1)

AA型・24(73):

啊啊(1), 吃吃(1), 咄咄(1), 噶噶(1), 格格(1), 哈哈(27), 呵呵(13), 哼哼(2), 哧哧(1), 嗚嗚(1), 嘻嘻(5), 吁吁(1), 喁喁(2), 噯噯(1), 嘖嘖(3), 嚙嚙(1), 簌簌(1), 格格(1), 唿唿(1), 拍拍(2), 嘍嘍(1), 颯颯(1), 騰騰(1), 突突(2)

AAA型とAAAA型・11(15):

嚙嚙嚙(2), 噠噠噠(1), 哆哆哆(1), 呵呵呵(1), 嗚兒嗚兒嗚兒(2), 嘖嘖嘖(3), 啞啞啞(1) 哆哆哆(1), 咯咯咯咯(1), 哼哼哼哼(1), 踏踏踏踏(1)

AB型・28(50):

吧啞(1), 吧啞・吧啞(2), 味溜(1), 叮嚙(1), 啞嚙(1), 嚙啞・嚙啞(2), 啞啞(1), 咯噠(2), 咕咚(11), 呱咕(2), 咕咕(1), 咕嚙(1), 咕嚙(2), 啞啞(1), 唿啞(1), 咯吧(2), 嚙味(1) 啞啞(1), 鏗鏗(2), 嚙味(1), 嘆通・嘆通(2), 噠測(1), 噠啞(2), 唿啞(1), 唏溜(2), 窸窣(1), 吱啞(1)

ABB型・17(36):

鏗啞啞・嚙啞啞(5), 得楞得楞(2), 滴溜溜(1), 嚙啞啞(1), 嚙啞啞(1), 咕咚咚(4), 咕啞啞(2), 咕嚙嚙・咕啞啞(3), 擗拉拉・擗啞啞(2), 唿嚙嚙(1), 拍喇喇(2), 鏗啞啞(3), 簌落落(1), 忒楞楞(4), 忒兒啞啞(1), 哇呀呀(2), 吱啞啞(1)

AABB型・6(7):

哼哼唧唧(1), 咕咕咯咯(1), 喃喃啞啞(1), 噠噠測測(1), 噠噠啞啞(1), 嗚嗚啞啞(2)

ABAB型・11(16):

噠嚙噠嚙(1), 叮嚙叮嚙(1), 唿啞唿啞(1), 咕咚咕咚(2), 咕啞咕啞(1), 咕嚙咕嚙(1), 嚙味嚙味(2), 嚙啞嚙啞(1), 唿嚙唿嚙(2), 嚙味嚙味(2), 忒兒啞忒兒啞(2)

ABCD型・4(4): 嚙楞嚙楞(1), 噠嚙嚙(1), 唏溜嚙啞(1), 啞溜嚙啞(1)

ABCB型・2(3): 咕啞咯啞(1), 唏啞嚙啞(2)

その他: 扎喇喇 扎喇喇 扎喇扎喇 扎喇喇

\*注: 数字は擬声語の語彙数で、( )内は使用延べ数である。

表9

擬声語の型	A	AA(AA AA) <sup>51</sup>	AAA	AB(AB AB)	ABB	AABB	ABCB	ABCD
語数 / %	16/13.4	28/23.5	7/5.9	39/32.8	17/14.3	6/5.0	2/1.7	4/3.4

\*注：語数/比率(%)はある型の擬声語の語数が『兒女英雄伝』における擬声語の総数の119語にある比率を占めると意味する。

以上の各型を合計すると119語になる。各型の頻度について、野口（2003）は表9のような内容を導き出した<sup>50</sup>。

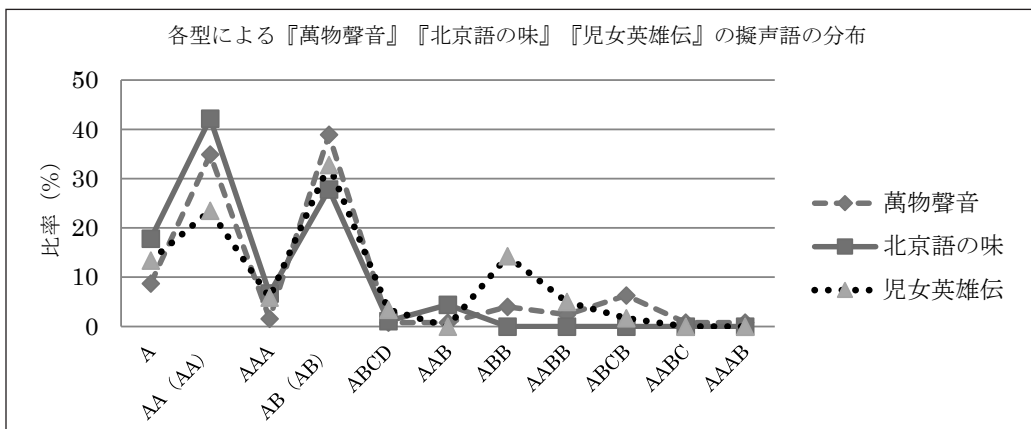
この表には、特殊型の「扎嘯嘯 扎嘯嘯 扎嘯扎嘯扎嘯嘯」<sup>52</sup>が入っていない。『萬物聲音』にあって、『北京語の味』と『兒女英雄伝』にないのはAABC型、AAAB型である。また、『兒女英雄伝』にあって、『北京語の味』にないのはABB型、AABB型、ABCB型である。そして、『北京語の味』にあって『兒女英雄伝』にないのはAAB型だけである。各類型の分布状況をグラフにして下に示す。

グラフの表示のように、『萬物聲音』『北京語の味』『兒女英雄伝』の三者の擬声語全般の分布傾向はよく近似している。しかし、ABB型は『兒女英雄伝』に比較的に多く見られる。型の全般の使用比率を見ると、『萬物聲音』と『北京語の味』の分布は『兒女英

雄伝』より、変動がもっと激しいため、それらにおける擬声語運用のバランス性と総合性は弱いことがわかる。

一方、『萬物聲音』と『北京語の味』の状況と異なる点がある。これは擬声語の使用延べ数のことである。『萬物聲音』には、16語の擬声語が34回で、『北京語の味』には、12語が28回使われた。『兒女英雄伝』の擬声語の全体から見ると、この現象をまとめて、次のように示す<sup>53</sup>。

つまり、重複使用される51語は総語数の43%に占め、191回使われている。それゆえ、『兒女英雄伝』のある擬声語の使用延べ現象がさらに著しい。しかも、それらの擬声語は多種の自然音を表わす例も多くある。例えば、野口（2003）は、『兒女英雄伝』の擬声語の意味分野を「人や動物の声」と「物音」<sup>55</sup>に分けて、AA型の擬声語を分析した。実際には、



型	A	AA(AA AA)	AAA	AB(ABAB)	ABB	AABB	ABCB	ABCD
語数/使用延べ数	16/56	28/77	7/11	39/66	17/36	6/7	2/3	4/4
重複 <sup>54</sup> の語数/使用延べ数	11/51	8/56	3/7	17/44	10/29	1/2	1/2	0

『兒女英雄伝』における擬声語の意味分野の「人や動物の声」と「物音」は人の声、動物の声、無生物の音、自然現象の音と動作及び動作による音などに細分することができる。例えば、『兒女英雄伝』に、擬声語「吧」は7回使われているが、それらの表す音には共通した特徴も見られるものの、それぞれ意味が別々である<sup>56</sup>。それゆえ、『兒女英雄伝』における擬声語の持っている包括的な特徴は『萬物聲音』と『北京語の味』より顕著であると見える。

## 6 おわりに

近代日本の中国語学習の関係書である『萬物聲音』と『北京語の味』の出版は35年の間隔があるとはいえ、そこに収載されている擬声語の一致している特徴が見られる。それらは擬声語の表記方法や自然音の分類、形態の特徴、使用分布などの面で似ている。

しかし、現実の中国語と対照して言うと、『萬物聲音』と『北京語の味』の中の擬声語は型の多様性及び使用頻度のバランスがより不安定であるように見える。つまり、近代日本の中国語関係書における擬声語の音形式の

使用自由度及び意味分野の分布から見ると、それらの使用率が比較的なコントラストを示している。しかし、この結果は不確定である可能性がある。その理由がある。まず、『萬物聲音』の例文が会話体であるのに対して、『兒女英雄伝』は書き言葉の影響で作られたことである。その他、擬声語の例文の数が少ないことも、人による語の使い方或は使用習慣などが異なることも可能的な原因である。そのため、近代日本人の学習した中国語擬声語の特徴を明らかにするために、さらに多くの資料を考察しなければならない。

次に、中国語関係書における擬声語の考察は語の形態構造、意味分野のほか、擬声語の音節パターン・音韻構造をも検討する必要がある。この研究は語音の内部から近代日本人の中国語教育における言語認識を探求することに焦点を当て、音韻の形態構造と意味分野の関係を考察してみる。

今後の課題は、特に擬声語の語義と音韻の関係を検討することを通して、近代日本人の中国語の語音認識の特徴を深く解釈し、そこに存在する変化・発展の状況を説明することである。

## 注

<sup>1</sup> この英文の書名は『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』の略称としての『萬物聲音』の訳文である。

<sup>2</sup> 『国語学研究』(1998)第37号 pp.1-10

<sup>3</sup> 『漢語学習』(2011)第1期 pp.96-107

<sup>4</sup> 『外国語学研究』(2016)大東文化大学大学院外国語研究科編 (17) pp.125-134

<sup>5</sup> 六角恒廣(1989)などにより、江戸時代の唐語の学習も明治初年から昭和20年までの中国語学習も実用語学の時期であるが、昭和20年以降は文化語学の中国語教育になる。

<sup>6</sup> 六角恒廣(2002)『中国語教育史稿拾遺』不二出版 pp.167-168

<sup>7</sup> 『萬物聲音』瀬上恕治 1906年 徳興堂印字局。『北京語の味』大山聖華 1941年 中華法令編印館。

<sup>8</sup> 尾崎実(2007)「普通話常用詞の変遷—清末・民国時代の語彙と現代語語彙—」(『尾崎実中国語学論集』好文出版)pp.51-52

<sup>9</sup> 野口宗親(1993)「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第42号 p5

<sup>10</sup> 「兒化」は「ほかの音節につく時、前の音節の一部が抜け落ちたり変化したりする」(王占華・一木達彦・苞山武義 2004『中国語学概論』駿河台出版社p58)という音変現象を指す。

<sup>11</sup> 六角恒廣(1984)『近代日本の中国語教育』不二出版 p10による。

- <sup>12</sup> 中国語関係書目の分類で、『萬物聲音』と『北京語の味』の類別は六角恒廣（1991・1994・2001）と波多野太郎（1985）を参考とする。
- <sup>13</sup> 六角恒廣（1985）『中国語関係書目』（pp.7-81）の収録状況による。
- <sup>14</sup> 不二出版1991年。第I期は五集からなる。每一集には四巻がある。収録のものは近代日本の中国語教育の関係書である。
- <sup>15</sup> 『中国語教本類集成』の「序」を参考とする。同様の記述は六角恒廣（1994）『中国語書誌』にも見られる。
- <sup>16</sup> 『北京語の味』の「自序」による。
- <sup>17</sup> 『萬物聲音』 p7
- <sup>18</sup> 大山聖華の基本情報は筆者が調べたが、全く見られない。
- <sup>19</sup> 自然音（現象）の項目は原文より転記するものである。擬声語（注音符）も同様である。
- <sup>20</sup> 『北京語の味』「擬音一覧」にはウェード式表記はついていないが、「注音符號解説」に注音符のウェード式表記が付いている。これは筆者が「注音符號解説」により改めて付けた。
- <sup>21</sup> これは通常理解ではピンインのri yingと二音節になる。一音節のringだとすると、北京語の音韻体系から外れるが、擬声語ではあり得るかもしれない。それについての詳細な論説は本論にあげない。本表は擬音の表記にする。下の「ㄨ ㄩ ㄆ ㄇ」も同様である。
- <sup>22</sup> 清国駐屯軍司令官陸軍少将の仙波太郎の作った「叙」（『萬物聲音』pp.1-3）の言葉（p2）である。この部分の原文は「卷首に王氏の合聲字母表拼音表を掲げ次に各種の感投詞と所有有生非生各物の聲音に及び々例を示し且付するに譯語と音解を以てす」である。その中に、「譯語と音解」という語がある。
- <sup>23</sup> 王照の官話合声字母は中国清末期の1901年における漢語表音文字の漢字筆画式字母方案であり、中国語の発音標記号改革の先鞭である。合声字母は漢字の偏傍を利用して文字に仕立てたもので、中国の伝統的な反切法を参照したものである。それは発音を音母（50個）と喉音（12個）の2種類に大別して、4つの声調を加える。合声字母は音母（字母）と喉音を合わせてある字音を表記する。
- <sup>24</sup> 六角恒廣（1994）『中国語書誌』不二出版 p112
- <sup>25</sup> 「十年之中，堅忍進行，傳習至十三省境，拼音官話書報社先設於保定，後移北京，編印之初學修身、倫理、歷史、地理、地文、植物、動物、外交等拼音官話書，銷至六萬余部」という説明が王照の「官話合声字母原序」（王照『小航文存』（沈龍雲主編『近代中国史料叢刊第二十七輯』文

海出版社）pp.86-87）にある。

<sup>26</sup> 『周有光語文論集第一卷』を参考とする。

<sup>27</sup> X、Y、Zなどで表記する場合もある。

<sup>28</sup> 鈴木和子（1988）の「変異体」の概念を参考とする。鈴木（1988）は独立の単語として分析できるのは基本形と変異体であるとしている。基本型にはA式、AB式（ABAB式、A里AB式）、AAB式、AABB式、ABCD式（A里CD式、ABCB式）があり、変異体にはAA式、ABB式、AAA式、ABBB式、臨時形式のABC式、ABA式、AAAB式がある。基本型と変異体の関係について、鈴木（1988）は次のように5点を指摘している。

①基本形に戻せない。

②途中で停頓できず、一気に発音される。

③“喃喃”“潺潺”など一部文言をのぞき口語では音節全体が軽く短く発音され形容詞の重ね型のごとく、2音節以降の陰平声化に止まらない。

④方言でル化現象が起る場合、普通、最後の音節がル化する。

⑤重量で派生した語は、あたらしい音声のコピーで、原型と語義の異なる場合が多い。

このように、本論は変異体と臨時形式を合わせて特殊型とする。

<sup>29</sup> 王占華・一木達彦・菖山武義『中国語学概論』駿河台出版社2004年 p58

<sup>30</sup> 発音が同じで、用字が異なる擬声語は重複としない。

<sup>31</sup> AAAA型の擬声語そのものは1つの自然音或は一回の自然音を表わす場合AA型の重複型としない。つまり、すべてのAAAA型をAA型にすることではない。

<sup>32</sup> 連続する自然音は持続時間が少々長く、1つの周期の音を指す。繰り返しの自然音は何回かの周期の自然音を指す。

<sup>33</sup> これはピンインで、筆者が注記した。

<sup>34</sup> 同上

<sup>35</sup> 天沼寧（1984）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版 p7

<sup>36</sup> 日向茂男編（1991）『擬音語・擬態語の読本』小学館

<sup>37</sup> 武田みゆき（2000）「日中擬音語の語彙度一人間の活動に関する音と外界音を中心に—」『ことはの科学』第13号 名古屋大学言語文化部言語文化研究会 pp.171-186

<sup>38</sup> 平弥悠紀（2005）「XYXYタイプの擬音語」『同志社大学留学生別科紀要5』pp.1-15

<sup>39</sup> 「声」と「音」の区別によって、擬声語を狭義の擬声語と擬音語に分ける方法がある。平弥悠紀（2005）もこの方法を採用し、意味分野の確定を

行っている。本論の擬声語という用語は「声」と「音」の両方を模倣するものを指す。

<sup>40</sup>「本書章を分ちて六章となし、第一章に於ては感投詞につき々解釋をなし、其例証を加へ、第二章に於ては人の動作に因り起こる音聲を含めるものを、第三章に於ては物體と物體との摩擦により起こる音聲を含めるものを、第四章に於ては鳥類の鳴聲、第五章に於ては獸類の鳴嘯の聲、第六章に於ては蟲類の鳴く音を含める北京官話の記載したり。」「(『萬物聲音』p7)

<sup>41</sup>「その他」の型別はAAB型、ABB型、AABB型、ABCB型などを含める。この類別の擬声語に具体的な型別を付けて表示した。

<sup>42</sup>各部分に載っている擬声語は一種だけの自然音を表わすものではない。例えば、(一)に載っている自然音は基本的に動物の声であるが、「喧嘩する時」の声と「小孩兒」の声は人の声である。そのため、表8は擬声語の具体的な意味による。

<sup>43</sup>平弥悠紀(2005)『XYXYタイプの擬音語』『同志社大学留学生別科紀要』第5号 p14

<sup>44</sup>平弥悠紀(2005)『XYXYタイプの擬音語』『同志社大学留学生別科紀要』第5号 p14

<sup>45</sup>尾崎実(2007)『尾崎実中国語学論集』好文出版 pp.27-47

<sup>46</sup>中国の通俗小説。清の文康作で、40話である。道光年間(1821~1851)成立。光緒4年(1878年)刊。

<sup>47</sup>尾崎実(2007)『尾崎実中国語学論集』好文出版 p39

<sup>48</sup>野口宗親(1993)「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』』『熊本大学教育学部紀要人文科学』第42号pp.1-11。筆者が利用した『兒女英雄伝』の版本は1991年上海古籍出版社のものである。底本は光緒4年聚珍堂初刻本である。

<sup>49</sup>これは『兒女英雄伝』における擬声語だけである。紙数に限りがあるので、擬声語の用例は付けていない。そのため、この不備な点で、擬声語の意味分野はわかりにくいかもしれない。

<sup>50</sup>野口(1993) p 11によって、筆者は作った。

<sup>51</sup>野口(1993)はAAAA型とAAA型をAA型の重複型としたが、ABAB型とAB型は別々にしている。本表はAAAA型とAA型を、ABAB型とAB型を合わせて統計した。

<sup>52</sup>これは特殊型の複合型の擬声語である。これは一回の自然音(漁鼓の音)を表わすが、ABB型とAB(AB)型の2種の型で、4つの擬声語からなる。

<sup>53</sup>野口(1993)による。

<sup>54</sup>これは「重複使用される」という意味を指す。

<sup>55</sup>野口宗親(1993)「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』』『熊本大学教育学部紀

要人文科学』第42号p4

<sup>56</sup>①先打了一照“回身出來”就抬腿吧的一脚,把那小和尚的屍首踢在那拐角牆邊(訳文:様子をさぐり、ひきかえてくると、足をあげてボンとひと蹴り、例の小坊主の死骸をみかくし堀のあたりまで蹴飛ばし—p 75(上))。(第6回)

②用了個“葉底藏花”的架式,吧,只一個反巴掌,早打在他腕子上,揆了開去(訳文:葉底藏花の技で、パット、反巴掌一撃、早くも瘦せッポチの腕をひと打ちして、跳び退りました—p 79(上))。(第6回)

③輪起右腿甩了一個“旋風脚”,吧,那和尚左太陽上早著了一脚! 站脚不住,咕咚向後便倒(訳文:右足をクルット廻して、「旋風脚」の一技を放ち、和尚の左のこめかみをパットといち早く蹴上げましたから、何条たまりましょう、仰向けざまにダーンと倒れてしまいました—p 80(上))。(第6回)

④這一倒! 但見個東西翻在半空裡! 從半空打了一個滾兒, 吧, 掉在地下(訳文:その途端、見れば何やら空中血まみれとなり、クルットと廻って、トンと地面に落ちて来ました—p 94(上))。(第7回)

⑤鄧九公才聽得“十三妹”三個字, 早把手裡的酒杯吧的往桌子上一放, 說:“老弟, 你是怎生杯曉得這個人?”(訳文:鄧九公「十三妹」という字を聞いたとたん、手中の杯をドンと食卓の上に置き、「老弟、あんたはどうしてそのひとをご存じなのじゃ?」—p 198(上)) (第15回)

⑥不知又說了他一句什麼, 他把那個的帽子往前一推, 腦子上, 吧, 就是一巴掌(訳文:そいつは男の帽子を前へ押しやって頭の後ろをパンと平手でひっぱたく—p 117(下))。(第32回)

⑦些微使了點勁兒, 吧, 兩截兒了(訳文:ちょっと力を入れたとたん、プツンと二つに切れてしまいました—p 226(下))。(第37回)

\*上の中国語の例文は北京大学中国語言学研究中心(CCL)のコーパスで調査したもので、日本の訳文は『中国古典文学全集29兒女英雄伝(上)』(奥野信太郎・常石茂・村松暎 訳 平凡社 1960)と『中国古典文学全集30兒女英雄伝(下)』(奥野信太郎・常石茂・村松暎 訳 平凡社 1961)を参考とする。

## 参考文献

- 天沼寧(1984)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版  
何盛三(1935)『北京官話文法』東学社  
日向茂男編(1991)『擬音語・擬態語の読本』小学館

- 平弥悠紀 (2005) 「XYXYタイプの擬音語」『同志社大学留学生別科紀要』第5号 pp.1-15
- 波多野太郎編・解題 (1985) 『中国語学資料叢刊白話研究篇』不二出版
- 野口宗親 (1993) 「清代北京語の「象声詞」—『紅樓夢』と『兒女英雄伝』」『熊本大学教育学部紀要人文科学』第42号 pp.1-11
- 奥野信太郎・常石茂・村松暎 訳 (1960) 『中国古典文学全集29兒女英雄伝』平凡社
- 奥野信太郎・常石茂・村松暎 訳 (1961) 『中国古典文学全集30兒女英雄伝』平凡社
- 大山聖華 (1941) 『北京語の味』中華法令編印館
- 尾崎実 (2007) 「普通話常用詞の変遷—清末・民国時代の語彙と現代語彙—」『尾崎実中国語学論集』好文出版 pp.51-52
- 六角恒廣 (1984) 『近代日本の中国語教育』不二出版
- 六角恒廣 (1989) 『中国語教育史論考』不二出版
- 六角恒廣編・解題 (1991) 『中国語教本類集成』不二出版
- 六角恒廣 (1994) 『中国語書誌』不二出版
- 六角恒廣 (2001) 『中国語関係書目 (増補版)』不二出版
- 六角恒廣 (2002) 『中国語教育史稿拾遺』不二出版
- 瀬上恕治 (1906) 『萬物聲音』徳興堂印字局
- 鈴木和子 (1988) 「象声詞のタイプと音声描写特長」駒澤大学外国語部論集 (通号 27) 1988年 pp.121-135
- 武田みゆき (2000) 「日中擬音語の語彙度—人間の活動に関する音と外界音を中心に—」『ことばの科学』第13号 名古屋大学言語文化部言語文化研究会 pp.171-186
- 文康 著、奥野信太郎・常石茂・村松暎 訳 (1960) 『兒女英雄伝』平凡社
- 王照《小航文存》沈龍雲主編 (1966) 『近代中国史料叢刊第二十七輯』文海出版社
- 王占華・一木達彦・苞山武義 (2004) 『中国語学概論』駿河台出版社
- 周有光 (2002) 『周有光語文論集・第一卷』上海文化出版社